

## 追悼小野寺規夫先生（小野寺規夫教授追悼号）

著者名(日)	荒牧 重人
雑誌名	山梨学院大学法学論集
巻	66
ページ	5-7
発行年	2011-02-15
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1188/00000382/">http://id.nii.ac.jp/1188/00000382/</a>

## 追悼 小野寺規夫先生

荒 牧 重 人

小野寺規夫先生の追悼の言葉を書いていることが未だに悪い夢のような気がします。

先生の訃報を受けたのが、二〇一〇年新司法試験の「合格者祝賀・激励の会」の数日前のことでした。山梨学院大学法科大学院は小規模大学院ながら過去最多の一四人が合格し、合格率は全体で一六位、私学では五位という好成績でした。この結果を報告して、先生にも大変喜んでいただいたばかりでした。「祝賀・激励の会」で先生にお会いできることを、教職員や学生もみな楽しみにしていましたので、本当に残念でなりませんでした。先生のお教えを受けて合格した学生も、先生に感謝の言葉を伝えられないことをとても悔んでいました。

小野寺先生は、甲府地方・家庭裁判所の所長として赴任されてから、裁判官・弁護士・本学教員による「判例研究会」を立ち上げ、県内法曹関係者の連携・協力関係をつくってくださいました。東京高等裁判所退官後、本学法学部の教授に就任なされてから、裁判官という実務の豊富なご経験と裁判官では希有な人的ネットワークなどをフル回転して法学部の強化にご尽力くださいました。そして、本学に法科大学院を設置する際には、先生のご見識と人脈と交渉力などを存分に活かされ、存在感のある法科大学院づくりに手腕を発揮してくださいました。先生なくしては、法曹養成の実績のない本学において法科大学院は発足できませんでした。

先生は、初代の研究科長として教職員の先頭に立ち、時代が必要とする法曹のあり方を追求しながら、学生には「基本書を読みなさい」と基礎・基本の大切さを徹底しました。また、「司法試験を受けるのは教員ではなく君たちだ」と学生の主体性・自主性を喚起し続けました。その一方で、先生お得意の「ノミネーション」を学生にも活用され、教員と学生の「距離」が非常に近いアットホームな法科大学院の状況をつくりだしてくださいました。また、先生は、日本のトップクラスの教授たちを特別講義に招聘し、学生が最高水準の講義を受けることができるようにもしてくださいました。

さらに先生は、甲府地家裁長の時代からの人脈も活かして県内法曹関係者と良好な関係をつくりながら、山梨という地で地域に根ざす法曹養成を進め、本法科大学院は全国のなかで県内法曹との関係が最も良好な法科大学院であると公言できるような状況をつくってくださいました。また先生は、法科大学院法律事務所の所長として、無料法律相談に当たられるなど、地域社会にも広く貢献してくださいました。先生の温かく丁寧な対応は相談者にとっても好評でした。

法科大学院をめぐる状況は大変厳しいものがありますが、先生のおかげで、本法科大学院は法曹養成の歩みを着実に積み上げており、この五年間に五〇人の合格者を輩出しました。そして、学生支援ナンバーワンのロースクールとして全国からも注目を集めています。

このようにいうと、先生からは「まだまだやることがある」「もっともっとできることがある」というような、厳しくも温かいお言葉が返ってきそうです。わたしが先生を引き継いで法務研究科長になってから、会うたびに、連絡をするたびに、いつもわたしの健康状態を気遣ってくれるとともに、励ましとアドバイスをし続けてください

ました。

小野寺先生には、感謝の言葉はいくつあっても言い尽くせません。先生のご意志・熱意を受け継いで、特徴ある「きらりと光る」法科大学院づくりを一層進め、単に司法試験の合格者を増やすということではなく、本法科大学院修了者が社会的な信頼を得、社会に貢献するような法曹養成に努めていく所存です。

どうか、天国でおいしいお酒を飲みながらも、本法科大学院の行く末を見守りください。